

巡視艇「うみぎり」船長インタビュー

自分達がやらなかつたら誰がやる！

第二管区海上保安本部の宮城海上保安部に所属する巡視艇「うみぎり」。冬を迎えた現在もなお、巡視艇や小型ボートなどを併用しながら、行方不明者の搜索を連日行っている。「うみぎり」の船長が搜索の実際とその思いを語った。

松島湾でがれきを掻き分けながらの搜索

——現在の搜索の状況は？

今は、海上を漂流する行方不明者を探しつつ、主に水中ソナー^{*}を使って海中を探り、気になる影があれば記録し、後日、潜水士がそのポイントに潜って搜索するという方法です。
——搜索するエリアはどのように決まるのですか？

宮城海上保安部が編成する搜索船隊の各船に日々大まかな搜索エリアが指示され、巡視艇「うみぎり」には主に松島湾と仙台塩釜港以南の宮城県沿岸海域が割り当てられます。その中で気象・海象を見て、沖が時化^け

いるときは小型ボートを使って松島湾内を搜索するとか、私が搜索計画を立てています。

——搜索はどのぐらいの時期から？

震災の翌日からです。震災当日、私は公休日でしたので「うみぎり」が係留する岸壁の近くに買い物に来ていたんです。あまりに大きな揺れが来たので、間違いなく津波警報が出ると思い、走って船に向かいました。

船では乗組員が出港準備を始めていましたが、私は当時得られた情報から出港しないことを決め、乗組員に退避を指示しました。以後は乗組員と手分けして、近くの工場で働く人や住民に避難を呼びかけました。一時避難所になっている塩釜港湾合同庁舎に誘導し、途中、早く歩くことのできないお年寄りをおぶっていったり……。とにかく夢中でした。

——「うみぎり」は無事でしたか？

奇跡的に無事でした。塩釜港が島々に守られていることと係留場所が岸壁の影で津波の直接波の影響を受けにくかったからだと思います。水位の上昇は最大で4m程あったと思いますが、係留している防災型ポンツーン^{*}

第二管区海上保安本部 宮城海上保安部「うみぎり」船長の岩間利隆。「うみぎり」は私にとって母親のような存在。危ない所にも連れて行くけど、必ず自分を港に連れ帰ってくれる」と語る。



の許容範囲でもありました。
——当初の搜索の様子？

松島湾は、かきや海苔の養殖が盛んなので津波で流出した網やロープが塩釜港内のあちこちに散らばっており、数日間はとも「うみぎり」を出せる状態ではなかったです。日の出と共に6〜7時頃から、ゴムボートと小型ボートで漂流する網やがれきを掻き分けながら松島湾内の搜索・救助に向かいました。乗組員で分けし、岸壁では網やがれきを引き揚げ、ボートのメンバーは搜索に。ボートでの搜索は体が冷えるので2〜3時間交代で。それをひたすら繰り返しました。搜索のほか、航路確保の指示も出ていましたので、主要航路の障害物の除去も行いました。

「うみぎり」で沖側の搜索ができるようになってからは、主に潮目を見て行いました。家やコンテナをはじめ目を疑うほどの凄まじい数のがれきが漂流していて、幅10mぐらいのがれきの壁が延々と続いている状態でした。この潮目に沿っての搜索が最も有効な方法で5月頃まで続けました。乗組員も疲労してくるので「休みをとろう」と言うのですが、みんな「休んでいいのかよ」という感じで休んでくれなくて。初夏を迎える頃からは、他管区の船と交代で休日を入れながら搜索にあたっています。

——搜索する中でご遺体を目の当たりにしたときの心境は？
これまでに、震災前には考えられないほどのご遺体を収めました。ご遺体を揚収した際は必ず手を合わせますが、小さな子どもだったときは特に泣いて涙がでました。2〜3週間、その光景が毎日夢に出てきたほどです。
——搜索とがれきの除去は同時に進めるのですか？
搜索を進めながら、財産を守るのも任務ですので、流されて浮いている漁船やプレジャーボートの曳航作業も行いました。明るいうちは行方不明者を捜し、夕方からそれらを曳航して。漂流する船の数も多く、中には網と絡まっているものもありましたが、可能な限り曳航し、持ち主に引き渡すようにしました。

乗組員全員の士気を保つことが大切

——船長としてのどのような使命感

をお持ちですか？
以前、幹部の訓示に「自分達がやらなかったら誰がやる！という気持ちで職務に当たれ」という話があった。まさにそうだなと痛感しました。「通行人はもちろんなく、船の往来も震災前と比べだいぶ少なくなつた海域で自分らが見つけられなかったら誰が見つけらんだ」と。普段からそういう気持ちを持ちたいと思っています。

——今、苦心されていることは？

今は、士気を保つことです。たとえ一生懸命搜索していても結果が出ないと、もう見つからないんじゃないかと心が折れそうになります。乗組員みんな自問自答してわかっていんどすけど、「まだ見つかる、がんばろう」と、あえて口に出して伝えるようにしています。

——地元の方からはどんな声が？

今は月に2回ぐらい、車で管轄区域の漁港などを周るようにしています。漁港に漁船が並び、岸壁で漁師さんが漁網を準備している姿を見るとなんだかホッとします。一方で、行方不明の家族を探して涙を歩く方もいらして、「港のあの辺にいますよ」という話を聞くことができたかもしれません。この場合は宮城海上保安部に報告し、潜水士の搜索計画に盛り込んでもらいます。家族の帰りを待っている人がいることを再確認し、気が引き締まり士気もさらに高まります。

——お仕事での喜びとは？

行方不明者を見つけて、ご家族のもとに帰すことは達成感になります。喜びはないですね。複雑な心境です。

——最後にメッセージを。

全国の方に、ご支援いただいております。ありがとうございますとお礼を申し上げます。業務面では他管区から多くの巡視船に応援に来ていただき、その際、食料を分けてくださったりもしました。涙が出るほど嬉しかったです。また、避難所で生活していた私の家族も支援物資に助けられました。本当に感謝しています。



上／小型ボートでがれきを掻き分けながら搜索する乗組員。
下／船長と乗組員。通常「うみぎり」は船長、機関長、航海科、機関科、主計科の乗組員で航海する。

※水中ソナー……水中音波で水中の物体を探知する装置。
※ポンツーン……浮棧橋のこと。